新潟県小学校長会広報
校長会報

題字…今山政三郎氏

発行所
新潟県小学校長会広報部
新潟市中央区幸西3－3－1
じょいあす新潟会館２階
ＴＥＬ　025－290－2231
ＦＡＸ　025－245－6060
E-mail：nksgko@niigata-inet.or.jp
印刷所　株式会社 文久堂

カット…長 尾 嘉 博
（新潟　有明台小学校）

未来におもいを馳せて　一つ一つを着実に

新潟県小学校長会　副会長　磯 貝 芳 彦

「校長先生、校長先生、たいへん、たいへん。あさがおの花がさいたよ。」朝、私に元気のいいあいさつをしてくれる一年生が校長室に飛び込んで来ました。手を引かれ、あさがおの鉢を見に行きました。見事の一言でした。色とりどりの花は見る人の心に安らぎとうるおいを与えてくれますが、元は小さな一粒の種です。一人一人袋から種を取り出し、おもいや願いを込めて種をまき、見えない種であっても水をやり続けた結果です。そのままにしておけば決して見ることのできない光景ですが、いのちを与え、いのちを育んでいる子どもたちの姿に教育の大切さを改めて考えさせられました。

社会構造の変化やグローバル化等が急激に進む中、未来社会の創り手となるための知識や力の育成が今こそ学校教育に求められています。それらは、日々の学習や活動を通して、子どもたちに培われていきます。未来を見据えた「小さな積み重ね」こそが、重要な鍵であり、大切な役割を担っていることを再認識しなくてならないと考えます。中央教育審議会における「論点整理」を受け、学習指導要領の全面改訂が進められ、いよいよ授業改善が本格的に始まります。社会に開かれた教育課程の実現に向け、「カリキュラム・マネジメント」の充実は、今からでも取り組める事項でもあります。

目の前の子どもたちが活躍する社会、二〇三〇年頃をイメージしながら、新潟県小学校長会は、個々として自校の状況分析と課題の明確化に努めます。課題解決に向けての具体的戦略を立て、学校経営に臨むとともに、組織として目的を一にし、情報の共有化を図り、横の連携を密にし、気概と誇りをもち、進んでいきたいものです。

（上越　東本町小学校）

平成二十八年度　第一回県小評議員会（報告）

日時　六月二十一日（火）十四時～十六時
会場　上越市「高陽荘」

一　開会の挨拶　近藤会長

関ブロ東京大会では、昨年の新潟大会での取組が確かであり、提案性のある内容であったと再確認できた。今回の三人の発表者に敬意を表したい。十月の日本教育会新潟大会もレベルの高い実践をもって提言に臨みたい。

新潟市への包括的権限移譲に伴う課題については、検討委員会の審議等を踏まえ、適切に対応していく。

二　議長選出　布川評議員

三　議　事

(一)　報　告

1　会務報告
2　全連小関係・関ブロ関係
3　県小代議員会柏崎・刈羽大会関係協議

(二)　各部の事業計画について

1　(1)　制度部　丸山理事
ア　各市町村における教育関係予算等に関する調査研究
イ　特別支援教育の充実に関する調査研究

2　(2)　福利部　遠藤理事
ア　給与、処遇改善や再就職・再任用に向けた調査研究活動の推進
イ　福利厚生に係る関係機関・団体との連携や諸活動の充実

3　(3)　研修部　後藤理事
ア　関ブロ・全連小への大会参加
イ　創造的な学校経営の展開に向けた地区別研究集会の開催
ウ　三委員会の調査研究活動等

4　(4)　広報部　神村理事
ア　初等教育と校長会報の発行
イ　調査研究活動報告書の発行
ウ　ホームページの運用
エ　全連小広報部との連携

5　日本教育会全国大会新潟大会
6　全連小高知大会・佐賀大会
7　関ブロ神奈川大会
8　平成二十八年度要望書の作成
9　規約改正に伴う、第二回評議員会開催日の変更（三月二十九日開催へ）

四　連　絡

(一)　平成二十九年度県小代議員会
・期日　五月十日（水）
・主管　新発田市北蒲原郡小学校長会
胎内市小学校長会

(二)　全連小刊行物の案内と購読

(三)　平成二十八年度日本教育会新潟県支部総会・研修会
・期日　七月九日（土）
・会場　上越市「高陽荘」
・講師　岩の原葡萄園
代表取締役　棚橋　博史　様

五　閉会の挨拶　磯貝副会長

想う

特別寄稿

教育雑感

新発田市教育委員会
教育委員　外山陽子

大学を卒業し、夢いっぱいで着任した学校は新発田商工高校といい、男子が断然多い学校でした。しかも、体育主任から「君の希望している器械体操部は永久にできない。」と宣言されてしまいました。ひしめく部活動の中、空いている場所はないかと捜してみると、一か所だけステージの上が空いていました。ステージの上で出来るものは何かと考え、ダンスを始めたのです。一生懸命練習して大会に出場してみたら、何と最下位。部員達にはオイオイと泣かれました。本を読んだり、強いチームを見学したり、プロの舞台を見に行ったりと必死で勉強しました。

五〇才の時に新潟中央高校に転勤したのですが、おしゃれな前任の先生に比べ、年中ジャージで短髪、お化粧もあまりしない私に、生徒たちは大変失望しました。三年生十八人が引退すると、二年生は五人に減り、毎日来るのは二人という情けなさでした。それでも一年生を懸命に勧誘して頑張りました。

新潟しか知らない「井の中の蛙」は蛙らしく、大都会の人に逆に新潟を知ってもらおうと、新潟にちなんだ作品を次々と創作して、全日本の大会に出場し続けた結果、ついに日本一・世界一になれたのです。夢も、砕けたピンチは、実はチャンスだったのです。

時はめぐり、教え子たちが大学を卒業して、新潟へ戻り、次代の生徒たちを育てて、再び全日本の大会を目指したのです。昨年は参加九十五校中、一位・二位を新潟が独占するという快挙を成し遂げてくれました。安吾賞を始め様々な受賞や、未だにこうやって活動できるのは、卒業生たちの活躍と支えのおかげです。「教師」という職業は実にやりがいのある素晴らしい仕事だと心から思っています。

高校一筋だった私が、教育委員に就任したのを機に、小・中学校の現場を様々な角度から勉強させていただきました。そして、あまりの多忙さに驚くとともに先生方の全方位の頑張りには頭の下がる思いです。いろいろな子どもたちがいるように、先生方も又、個性豊かです。仕事への責任感やアイデア、作業能率が高い等のすぐれた資質をもっている先生にはますます仕事が回り、せっかくの才能をすり減す、多忙な日々を送らざるを得ない現状があります。一方、校長も又、先生を選択することはできず、めぐり会った先生方と力を合せ、よりよい学校にしなければならない苦労があります。体調の悪い先生がいらっしゃれば、一人一人が一人以上の力を発揮しなければなりません。

このような状況を知った上でも、私たちはＮＲＴや、Ｗｅｂの結果、そして子どもたちが「分かる授業」「楽しい授業」を求めてしまいます。子どもたちは無限です。求めれば応えてくれます。愛情をそそげば、倍親しみを返してくれます。さらに多忙であることを口実にできない現実が目の前にあります。

五経年、十二経年の講師を務めさせていただいた時に必ず申し上げることがあります。

㈠「教員免許状は、溶けていくものである。」

初めて教員免許状をもらった時はまっさらで意欲も情熱もありました。やがて教えることに慣れて、大丈夫と思ってしまう。中には定年を迎えないうちに溶けてなくなってしまう人もいます。

㈡「子どもを恐れよ。」

怖がれということではありません。子どもたちは、様々な場面で情報交換をしています。さらにスマホやパソコン、ＴＶから情報を得ています。教室という閉鎖社会では教師という大人の人格が子どもたちに大きな影響を与えるわけです。教師が未熟だと子どもたちが低い質の教育を受けることになります。教師としての経験の長さが成熟ではないと言われています。古参でも未熟な人もいればその反対もあります。品物ではない人間らしい人間を育てる素晴らしい職業です。いつまでも、意欲と情熱、愛情と高い知識を持った教師であって欲しいものです。学歴によるのではなく、人間として魅力ある先生を目指して欲しいのです。

いろいろ授業参観をさせていただくと、普段の授業はもちろん、ＮＩＥ授業、人権教育、食育、さらに新発田市は日本語教育と、先生方の努力と熱意を拝見すると胸が熱くなります。そして子どもたちの一心さに涙が出ます。どうか、校長の強いリーダーシップと共通理解のもとで、よりよい「チーム学校」になれますように願っています。

郷土風土記

夢と志を希求する長岡人

長岡という町はすごい所だと思う。戊辰戦争、太平洋戦争で二回も市街地のほとんどが焼かれ、さらに中越大震災では、土台が揺るがされた。にもかかわらず、これだけの発展を遂げている。まさにフェニックスである。

長岡に住んでまだ十年余の私は、これを成し遂げている長岡人に惹かれている。数多の偉人にも大いに関心があるが、勤務地の四郎丸地区で、今を生きる方々の有り様に、強烈に惹きつけられている。そこで、「子どもたちに心のふるさとを」という志で活動している人々の様子を紹介し、「郷土風土記」の趣旨に迫りたい。キーワードは、夢、志、自立、自由、遊び心…である。

自由の天地を求めて

一九九九年、ＰＴＡ会長の山川は、子どもたちがＴＶゲームにのめりこむ様子に危惧を抱いていた。そこで子どもの遊び場として、学校の森作りを計画した。ところが、安全面から学校での建設は不可能となった。そこに地元の駒村が、車で二〇分ほどの所にある山林を貸そうかと声を掛けた。六〇〇〇坪余り、埋め立てられた谷は赤土で覆われ、石のように堅い。手付かずの森は人の侵入を拒む。この地を山川は「自由の天地」「本物の遊び場」と喜ぶ。

二〇〇〇年、山川の思いに賛同する十八人の大人と子どもが探検隊を編成し、地図作りに挑む。身の丈を超える藪をかき分け、急な崖を登ったり下りたりして、「ほとんど遭難状態だった。」と山川が振り返る苦難を乗り越え、開発に着手した。

赤城コマランド誕生

着手はしたものの、あまりの過酷さに進展は見られない。この窮地を二人の老人が救う。二人は、昔の植林の体験と技を駆使し、山川たちを導く。

「育つに一〇〇年。結果を見ることはない。」という言葉に山川は、「名も知れぬ心ある者たちの連綿とした行為が、今の我々を作っている。急いで作って、急いで遊んで、急いで立ち去らなくてもいいだろう。木々の成長に合わせてゆっくり楽しもう。今の子どもたちのことはもちろん、もっと未来の子どもたちのためになすべきことをしよう。」と思い始めた。これが今後の活動の基本的な考えとなった。そしてこの地を、四郎丸地区の鎮守赤城神社と地主の駒村の名をとって「赤城コマランド」と命名した。

つながる思い、広がる活動

シンボル「ツリーハウス」

二〇〇一年から、年に二回の植樹会が行われている。（今年で三十一回を数える。）二〇〇二年には、四郎丸小学校の六年生が総合学習と関連付け「ツリーハウス」を完成させた。ロマンと冒険の森の象徴として今も親しまれている。この頃から、新聞で取り上げられたり、環境や森林保護等の行政機関からの支援を受けたりするようになる。行政等との関係について山川のスタンスは明快だ。「行政とは仲良くする。相談したり支援を受けたりする。でも頼りきることはない。一般の人についても同様。来てくれて応援してくれる人は大歓迎。でも来ないからといって文句を言うようなことはない。」これはコマランドにかかわる人の共通理解となっている。

森のようちえん誕生

人の思いがつながっていく。神奈川県でシュタイナー教育の幼稚園に勤めていた古川が、赤城コマランドを訪れる。「ここで森のようちえんをやれないだろうか。」すると山川は、「無料で貸す。何をしてもいいよ。」

古川は、娘と二人だけでも始めるつもりだったが、ふたを開けたら十人の子どもが集まった。二〇〇八年のことだ。認可はなく、補助もない、青空保育のスタートが切られた。

今では年間二〇〇日も活動し園児も二十人を超える。何と九年目の今年中には、園舎が完成する。新潟市にあるログハウスを貰い受け、移築するとのこと。移送や地盤改良等にかかるお金だけでも大変な金額だ。「何とかなる。お金は後からついてくる。」そして本当に何とかなりつつある。

夢と志、自立、自由、遊び心

四郎丸地区には今年で四十九回目の地区民運動会がある。子どもたちのソフトボール大会も四十九回目だ。他にも二十回を超えるものが多数ある。よく続いている。地域の人に、その理由を尋ねると「物好きの集まり」と笑う。

山川の言う「名も知れぬ心ある者たちの連綿とした行為」のなせる業だと思う。成し得たいことがある。その志に共鳴する者がいる。力を合わせて、逆境を明るく乗り越えていく。自由で遊び心満載のしなやかな活動が、社会を動かしていく。これが長岡に息づくＤＮＡに違いない。

（長岡・三島　四郎丸小学校）

郡市だより

地域に根ざした教育を目指して

十日町市中魚沼郡小学校長会

「大地の芸術祭」と「苗場山麓ジオパーク」の二つの事業が示すとおり、多様な文化と雄大な自然を教育のフィールドとする十日町市中魚沼郡小学校長会は、小学校長二十二名、市立特別支援学校長一名をオブザーバーとして計二十三名で活動を行っている。小中一貫教育を推進する十日町市と保小中及び家庭との連携を推進する津南町。それぞれの教育資源や教育施策の特徴を生かして、郷土を愛し、自立した子どもの育成を目標としながら、年二回の総会と年三回の定例会を行っている。

一　活動の重点と組織

本年度は、「各専門部活動の充実」「学校経営ビジョンの向上を図る研修の充実」「会員相互の連携促進と親睦」の三点を重点に掲げている。会長を中心にした「地区代表校長会」、制度・福利・研修・広報の四つの「専門部会」、郡市教育振興会の事業を推進する「郡市小教研教科等部会」の三つの組織を設けて重点の達成を目指している。

二　活動の推進

本年度の活動を「研修の充実」「連携と親睦」の二点から紹介したい。

まず、研修では学校経営ビジョンの向上を図る協議を行った。本年度六月開催の関東ブロック研究協議会における提案発表レポートの検討を昨年度から、全体で二回、津南地区校長会で三回実施した。教育行政と密接に連携し、閉鎖的な組織運営の打開策を求めた事例について、会員全員で検討協議を重ねた。これにより、提案発表者のみならず、全会員の円滑な学校運営に資する研修となった。また、地域巡検研修も毎年実施している。本年度は、大地の芸術祭作品及び当地で有名な歴史的名家と醸造所を訪ね、全会員で地域の歴史・文化と産業への理解を深めた。

二つ目は、会員相互の連携を図る会誌の発行である。当地を示す古名「波多岐（はたき）荘」にちなみ、会誌名を『波多岐』として、全会員による随筆集を毎年刊行してきた。今冬で通巻三十七号を数え、会員一人一人の人となりを知り、思いに共感し、話題とすることで、互いの心の距離を縮めることに役立っている。雪深き当地なればこそ、教育への情熱が燃え上がる二十三名の当会である。

（倉俣小学校　江口正洋）

学校紹介

子どもの自尊感情と自己有用感を育む

加茂市立加茂小学校

一　学校の特色

校　舎

加茂市立加茂小学校は加茂市の中央に位置し、明治六年（一八七三年）六月一七日に開校され、今年度一四三周年を迎えます。学校の草創期から、常に進取の気風に富み、それぞれの時代の先駆的な教育実践に取り組んできました。現在もその伝統を受け継いでいます。家庭・地域も学校教育への理解が深く、極めて協力的です。

二　学校経営の基本方針

教育活動の一体感で、子どもの自尊感情と自己有用感を育む学校教育活動を推進しています。

加茂小の子どもたちは、素直で、指示されたことにはきちんと取り組みますが、「自分によいところがあると思う子は少ない」等の傾向が見られ、子どもの自尊感情と自己有用感を育むことが学校課題です。職員はこの課題を自覚し「選択と集中」「点検と改善・協働」を図りながら学校全体として取り組むことと、個人で取り組むことを両輪として、教育活動を推進しています。

三　特色ある教育活動

㈠　自尊感情を高める「音読タイム」と「音読発表会」

1年生の音読発表

週一回音読タイムを設定し、国語教材を読んだり、詩を群読したりしています。一年生からは六年生相手に音読し、評価してもらうという教育活動が、六年生からは国語教材を音読劇にするという教育活動が創り出されました。子どもたちは言葉のおもしろさに関心をもち、友達とのコミュニケーション力の育成の契機になっています。

㈡　自己有用感を高める「ふわふわ言葉」

月に一回、日常の中から見付けた友達の良さを伝え合い、認め合う「ふわふわメール」を学年毎に取り組んでいます。学校評価では、九〇％の子どもがふわふわ言葉で話していると回答しています。